



父からの電話

浅ノ川総合病院 神経内科
三秋 弥穂

先日、いつものように外来を終え、医局にある自分の部屋へ。昼食でも食べようかと椅子に座った瞬間に机上の携帯電話が鳴り、画面を見ると故郷の父からでした。仕事や子育ての多忙を理由に実家には年に一度帰るか帰らないかの私。申し訳なく思いながらもいつもの「たまには電話くらいよこせ」と電話に出てみると、いつになく慌てた父の声が耳に飛び込んできました。「1時間前から突然母さんの様子がおかしいんだ」まずは医療知識が全くなく慌てふためいている父をとにかく落ち着かせ、母の状況を聞き出し、思い当たる疾患と対処法を説明していきます。話の限りでは緊急度はさほど高そうではありましたが、それでも念のため検査は受けておいたほうが良さそうでしたので、当該科のある病院へ連絡をしてみるように話をして電話を切りました。

しかしその後も父の不安そうな声が耳から離れず、結局その日は午後の救急対应当番を同僚にお願いして、その足で小松空港へ直行、飛行機と電車を乗り継ぎ4時間かけて実家に帰りました。普段から「帰ってくるぐらいならそっちでゆっくり休め」と半分強がりと言っている父が、この日ばかりは空港に向かっている私に「気をつけて来てくれよ」、よほど不安だったのだと思います。帰った私の顔を見た瞬間、ほっとした表情に変わった両親の顔が今も目に焼き付いています。

父の話では、数年前に別の科へ1、2回かかったことがあるだけの総合病院に連絡してみたところ、既に夕方近くになってしまっていたにも関わらず快く受け入れに応じて下さり、MRIによる精査をして頂いたとのことでした。幸い検査では大きな異常は見つからずそのまま経過観察となり、翌日には症状が安定したことを確認でき、午後の便でまた慌ただしく金沢に戻りました。

久しぶりに、いえ恐らく初めて聞いた父の不安そうな声。私達医療従事者にとっては見慣れた症状であっても、初めてそれを目の当たりにした人にとっては不安や恐怖で頭が一杯になってしまうことがあるのだと改めて感じました。更には、時間外・予約無し患者さんの診察など、普段診察している側の私にとっては日常茶飯事のことですが、立場が逆になるとこんなにありがたく、そして心強い存在になるのだとしみじみ思いました。たまに「昼間に病院へ来ると混んでいるから・・・」などという理由で夜間の救急外来を受診する患者さんに出会うとどうしても顔が引きつりがちになってしまいますが、病院に来る患者さんはやっぱり大きな不安を抱えている人が多いはず。当直や明けの勤務が少しずつ辛く感じる年齢にはなってきましたが、しんどい時にこそ心に余裕をもって診療を受ける患者さん側の気持ちを考えるようにしたいと、強く感じました。忙しい毎日の中でつい忘れがちな当たり前の事に気づかせてくれた、そしてもう少しまめに故郷の両親の顔を見に行こうと思った、そんな「思いがけない一泊帰省」でした。